地域福祉活動職員の
福岡　まなこ
社協活動前進のために
No.53　2003年3月発行　　福岡県地域福祉活動職員連絡会　まなこ編集委員会

第４回福岡県「社協職員のつどい」開催

「本気の議論をしませんか？これからの社協」
～社協の存在価値を問う!!～

平成14年12月14日(土)・15日(日)
北九州市「ウェルとばた」

平成十四年十二月十四日（土）・十五日（日）に、第4回福岡県「社協職員のつどい」を開催しました。

過去3回は春日市のクローバープラザで開催しておりましたが、今回初めて、会場を移し、北九州市戸畑区に民間福祉活動の拠点として新たに平成十四年十月にオープンした「ウェルとばた」を会場に、「本気の議論をしませんか？これからの社協」をメインテーマに掲げ、一日目は六つの分科会、全体会を、二日目はサブテーマの「社協の存在価値を問う」を演題として、明治学院大学社会学部社会福祉学科の河合克義教授にご講演をいただき、二日間で過去最高の参加者百七十名を得て、大いに盛り上がりました。

本誌では、分科会の状況を中心にご報告させていただきます。

第一分科会

社協には、NPO・市民活動と協働する力があるのかを問う
～「組織の質」「ワーカーの質」について語り合う～

課題提起
たすけ愛京築　阿部かおり　氏

助言者
熊本学園大学　講師　小野　達也　氏

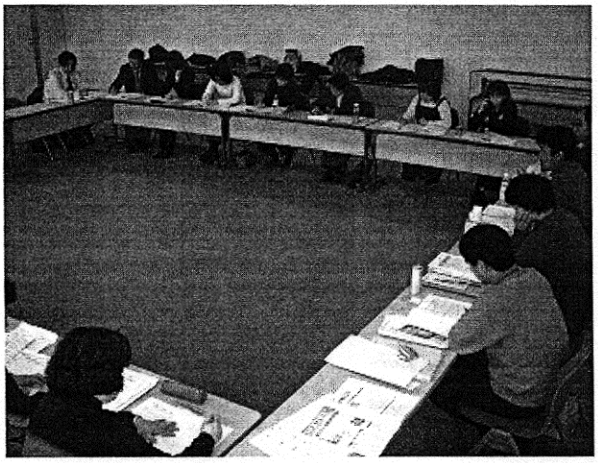
第一分科会は「社協にはNPO・市民活動と協働する力があるのかを問う」というテーマでたすけ愛京築の阿部かおりさんと熊本学園大学の小野達也先生を発題者・助言者に迎え、社協組織の質・ワーカーの資質について話し合いました。

午前中は阿部さんよりNPO法人としてのこれまでの取り組みとNPOの活動を通して見える社協の環境についてお話しいただきました。

たすけ愛京築の現在の活動は在宅福祉サービス事業をはじめ、行政の受託事業、各種公益法人との連携事業、介護保険事業など多岐にわたりますが、最初の活動は小さいものから始まり、地域の様々な課題（ニーズ）と出会い、向き合うことで新たな活動を作りだしていったようです。しかし、それは本来は社協がやってきた事であり、今の社協が出来なくなりつつあることではないのか？という指摘がありました。また、社協職員の事務量が増え、地域に出て行く時間が少なくなることで「社協の必要性・存在意義」を地域住民や行政、NPOに対して示せない状況にある社協が多いのではないかなどの点についてお話がありました。

それを受けて午後からは小野先生にまとめと課題提起をしていただきました。「社協、そして社協職員はどうあるべきか？」という視点で参加者からそれぞれの業務の状況について意見交換をおこないました。ここでは「今までの仕事をこなしているだけで…」、「地域担当でありながら地域を知らない」、「他の仕事と兼務」、「やりたい仕事が出来ない」「社協が地域から孤立していく感じ」などそれぞれが抱える様々な問題が出されました。

そして、最後にこの意見交換を踏まえて、小野先生に問題の整理をしていただきました。意見交換の中では地域担当職員と地域とのつながりの希薄さ、コミュ



ニティワーク実践のモデルの不在など社協職員の現状・社協の状況が浮き彫りとなりました。日々の実務をただこなすのではなく、その仕事がどこか繋がっている「地域」を常に意識すること、自分の仕事と地域のつながりを意識すること、そして地域の声をつかむ小さな実践の積み重ねによって仕事のやり方が変わってくること等のお話がありました。

時間等の関係もあり、ワーカーの資質・組織の質の議論までは話が進みませんでしたが、自分自身も含め、参加された皆さんが現状を分析し、「社協職員としての自分」について改めて考えることができたようです。

第二分科会

「カベ」という言い方はないでしょ！
～社協が介護保険事業に参入する必要性と、社協のもつ「公共性」の今後について語り合う～

発言者①
前福岡県ホームヘルパー連絡会
会長　泊　イクヨ　氏

発言者②
稲築町社会福祉協議会
事務局長　木山　淳一　氏

発言者③
田川市社会福祉協議会
会長　谷延　鎮義　氏

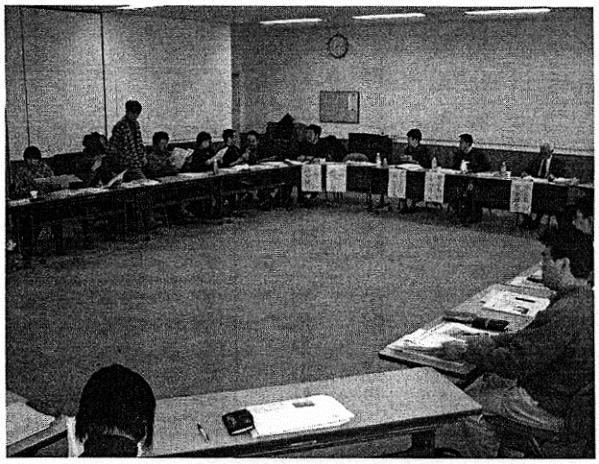
助言者
北九州市社会福祉協議会
福祉部長　渡辺　良司　氏

①民間事業者②「公共の立場」③「第三者の立場」この矛盾を克服して向かう先は・・・について、発言者・助言者を交えて、議論を行いました。

■泊イクヨ氏「在宅サービスの立場から」・・・
社協が、介護保険事業に参入する意味と必要性について・・・
・地域住民から必要とされる、社協のヘルパー。なぜなら、地域利用者の声を良く知っているからである。
・ホームヘルパーとして、芦屋町社協にヘルパーとして勤務していた時の事業展開についての報告。
※社協からのヘルパーの撤退はない。
・社協ヘルパーの必要性とのその他の役割。また、公的サービスとインフォーマルなサービスとの連携の必要性について。
・社協は、以前からコミュニティワークを実践してきた土台があり、地域をよく知っている。愛のネットワークの地域組織、ボランティア団体等々。
・ヘルパー単価の問題や、地域福祉推進する社協のヘルパーとしての、活動の視点を強調。

■木山淳一氏「コミュニティワーカーの立場から」・・・
・消費税と福祉について在宅サービスとの関連性について。
・介護保険事業の出発点から、社協がヘルパー事業を受ける経緯について、
・稲築町社協の組織についての説明。
・コミュニティワーク（27町内会）の取組みについて。
・いきいきサロン（地域の福祉力を高めていく。）14町内会で実施。
・地域住民が、地域福祉計画を作成している。
・社協しか出来ない事業展開。（創意工夫）が必要
・介護保険事業に重きを置かれる社協の現状に対して？
・公共性を持つ社協の役割について・・・
・社協は、利用者の生活課題を重視した介護保険事業が展開できる。

■谷延鎮義氏「社協幹部の立場から」・・・
・田川市のあらましについて・・・過去の経緯
・社会福祉基礎構造の中での社協の位置づけについて・・・



・医療保険と介護保険の関係
・地域福祉活動計画の策定の必要性。
・市町村合併について・・・
・合併後の社協の事業展開について
・人材の育成について※重要課題。

第三分科会

話してみらんね！　聞いてみらんね!!
～ズバリ！教えます！　障害とコミュニティワーク～

事例報告　「支援費制度の落とし穴」
報告者　NPO法人
在宅サポートセンター「ホット」
大里　恵　氏

事例報告・コーディネーター
「私の接点づくりのきっかけは…」
甘木市社会福祉協議会
前田　正剛　氏

事例報告1
「支援費制度の落とし穴」
大里　恵　氏

支援費制度になっても事業者が少ないので、事業者と利用者の対等な立場は難しいと思う。

相談窓口としては、社協は外れている。障害者は少数者なので採算が取れない。

直方地区では、支援費制度での事業者申請をしているところはわずか2社のみで、ほとんどの所が参入を見合わせている状態で、今後も事業者参入は少ない見通しである。その中ではたして選択できるのか？

この先、サービスが受けられない可能性もあるので、それならば自分たちでやっていこうという趣旨の元、NPO法人在宅サポートセンター「ホット」を立ち上げた。

事例報告2

「私の接点づくりのきっかけは・・・」

前田　正剛　氏

大学時代のボランティア活動を通じて感じたこと・・・食事介護は薬やご飯を汁物を全て混ぜて提供していたことや、年上の方に「ちゃん」づけで呼ぶ等人権感覚の無さ等・・・

社協へ勤めて二十年、当初は仕事もなく仕事相手を探す日々が続いた。

業務的な付き合いでは本音は探れない。ワーカーは目線を同じにすることが大切。友達として付き合う中からいろいろわかることがある。

自分自身ピカピカの障害者1年生（昨年脳血栓で倒れ、右半身麻痺の状態）。しかし、現場に出ないといけないと思っている。

社協職員も障害者に偏見がある。たとえば「人」の名前よりも「障害」の名前が出てくる。「車イスの大里さん」「大里さんが車イスに乗っている」

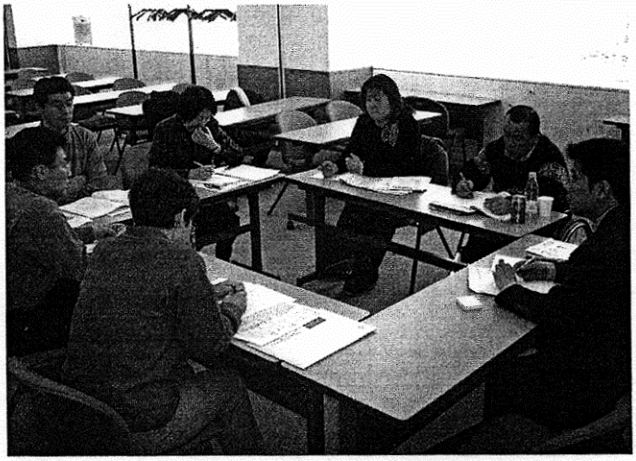
相談窓口に来る人のみの対応ではいけない。

グループディスカッション

「知る」をテーマに3班に分かれて

（1班）

ヘルパー事業の個人的な付き合いと地域担当の人間関係とは関わりの内容が違う。地域担当と個人的な付き合いの立場ではアドバイスも違ってくる。あるヘルパーさんの対象者が、「私は寝たきりで何もできないけど、私は何の役割になっているのか？」という相談に、「あなたがいるだけで人の輪やつながりがあり、人のつどいがあっている」と答えられたとのこと。



（2班）

それぞれの業種で「知る」作業はやっている。見えないSOSをいかにキャッチするかが重要。17時以降の関わりの持ち方、仕事でなく一人の人間として関わっていく工夫が大切。

（3班）

様々な分野の方とのディスカッションなので、立場が違う意見交換ができた。今後は職を越えた偏見を無くしていくことが重要。

報告者・コーディネーターのまとめ

〔大里氏〕

これまでに2つの社協の職員の方と二人三脚でやってきた。それは障害者計画を策定するので、声を出す団体が必要とのアドバイスを戴いて立ち上がったおかげで今日の自分がある。

障害者問題は幅広く視野を広げるともっとよく見えてくると思う。先述の2人の社協職員の方はいろいろな情報を提供してくれた。そのような社協の職員さんに出会えてとても幸せだった。皆さんもそういう職員になっていただきたい。

〔前田氏〕

大里さんは、社協の職員に情報をいただいたとおっしゃっていたが、実は逆に社協職員は障害者から色々な話を聞くことによって学んでいくと思う。目線を一緒にして「わがまま」な悩みでなく、「自己実現」及び「自己決定の意思」と見て、自分の価値観を見直して見ることも大切。そして「分からない」とは決して言わず、「ちょっと待ってください」と言って調べて返すこと、それが自分の蓄積となる。自分の価値で判断せずに照らし合わせることができる職員になっていただきたい。

第四分科会

学校でのボランティアの誤認識を問う

コーディネーター（兼発題者）

共生館医療福祉専門学校

副校長　時里　一義　氏

発題者

福岡市立警固中学校

教師　小金丸　紀代美　氏

苅田町社会福祉協議会

地域活動担当　藤澤　桂太　氏

この分科会では、発題者の方に学校や社協での福祉学習への取り組み・課題などを話していただき、それをもとにグループワークを行い、現場で活用できるような学校への働きかけのためのプログラムを作成しようという内容だった。

まず、時里氏が発表し「『総合的な学習の時間』は、学校の準備が整わないまま見切り発車となり、教師も福祉への理解がないまま授業を行っている。その結果、社協へ無理な体験学習の依頼があったり、授業を消化するだけになっている。学校と社協が相互の状況を知り、連携をとっていく必要がある」と話された。

小金丸氏は、学校の現場で実際に「総合的な学習の時間」に取り組み、また教員研修で、社協ボランティアセンターで4ヶ月間職員と同じ仕事を行った。「社協での研修は大きな糧になった。学校は社協をよくわかっていないし、係わるきっかけがない。これからどのような連携をとっていけばいいのか考えている。」と発表された。

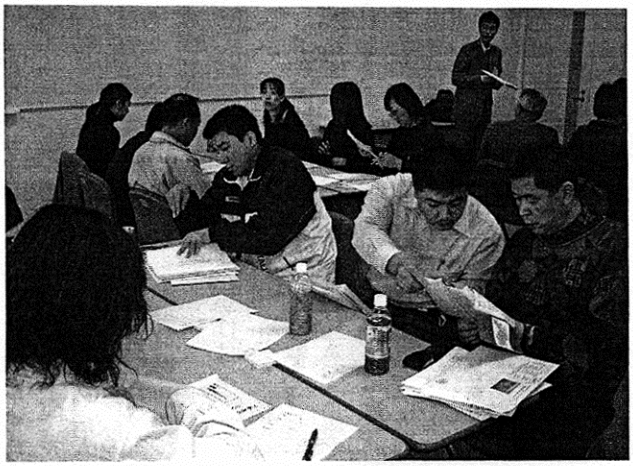
藤澤氏は、体験学習の指導者の育成と、学校との連携を図っていくために、福祉教育推進校の連絡会を結成。社協との連携はもちろん、学校相互の横のつながりも作る結果となった。「学校は、社協から見ると閉鎖的な世界に思える。社協か

ら学校へ積極的に働きかけ、開かれた学校づくりと、地域も一緒になっての福祉教育が必要ではないか」と発表された。

グループワークでは、それぞれの班に講師が入り、福祉教育プログラムの作成について話し合った。

グループ発表では、企画内容として、車いす、アイマスク体験をはじめとして、高齢者とのふれあい、当事者の話、施設訪問などが出された。

意見交換の中では、「体験や授業に追われるあまり、手段が目的化してしまう場合もある。大切なのはそのプロセスである」「社協がなぜ福祉教育を推進していくのかを考えていく必要がある」「『総合的な学習の時間』にとらわれすぎていないか。社協がするのは、これだけではないはず」「社協は教育委員会と研修などのしくみづくりや、アイデアを提供するべきではないか」など、多くの意見が出された。



最後に講師3名の方からコメントをいただき、学校、社協が一緒になって福祉教育を進め、また社協が積極的に学校へ働きかけていくことを確認して終了した。この分科会は、話合いのプロセスに大きな意義があったように思われる。

第五分科会

描いてみよう。あなたが求める コミュニティワーカー像！

～地域活動の実践者から学ぶ！ 福祉の地域づくり～

実践者
飯塚市菰田地区社会福祉協議会
会長　植木　二幸　氏

助言者
福岡女学院大学
教授　松永　俊文　氏

コミュニティワークとは？普段当たり前に使っているこの言葉ですが、ではその意味を正しく定義できるのかと問われると、私達は明確に答えられるでしょうか。「コミュニティワーク」。これは、社協職員にとって永遠のテーマなのではないでしょうか。第5分科会では、無謀にもこのテーマを取り上げました。皆さん社協職員それぞれに「コミュニティワーク」のイメージを持ち、理想の「コミュニティワーカー」像を目指しておられることと思います。

この分科会では、小地域福祉活動をコミュニティワーカーとして実践された飯塚市菰田地区社協会長植木二幸氏の実践報告をもとに、社協職員としての「コミュニティワーカー」の共通認識を探るため、議論を展開しました。

参加者の顔ぶれも、地域に直接関わっている方から、全く違う業務の方まで様々でした。

植木会長は、菰田地区の民生委員としても活動されながら、小地域ネットワークづくりに二十五年以上前から携わってこられました。その過程で大切なこととして、問題の把握、活動主体の組織化、活動計画の策定・実施・達成度・評価の三点を挙げられました。地域の問題を地域全体の問題として捉え、問題解決のために組織づくり（ネットワーク）を進めていくことの必要性を説かれました。

しかし、そこに至るまでには反対意見も多く、何度も根気よく話し合いを重ねて説得をされたということでした。

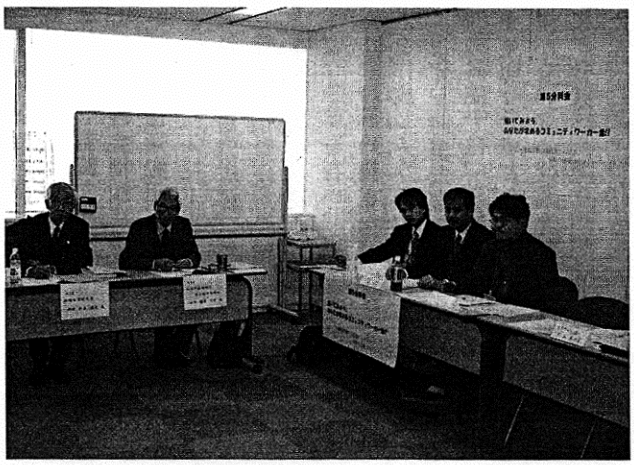
松永教授からは、「コミュニティワーカー」は「ソーシャルワーカー」であり、知識・技術・倫理を三位一体として有してヒューマンサービスに携わる社会福祉の従事者であると助言をいただきました。地域のニーズをいかに発見し、社会資源を活用して問題解決に結びつけていくか。あくまで住民が地域活動の主体者であり、ワーカーは側面的に援助する役割を担うものだと話されました。

お二人の意見をまとめると、社協職員は、現場に出て住民とコミュニケーションを取りながら社会資源の活用を図る。社協職員は全員が「コミュニティワーカー」であって、共通認識を持って社協活動に携わっていかなければならない。となるのでしょうか。

そのとおりだと皆さん思われることでしょう。ですが、これまで地域において「コミュニティワーク」を実践されてこられたお二人の言葉であるので、とても重みのあるものに感じられます。

時には、社協職員にとって痛烈なご意見もいただきました。しかし、それは、地域の実践者と社協職員の先輩として、期待を込められたものであり、暖かいエールをいただいた分科会でした。

最後に、植木会長、松永教授、お二人からもの凄い情熱とバイタリティを感じ



ましたが、本当に七十を越えられておられるんですか？

第六分科会

社協ってなに？ナニ？何？
・・・あっそっか!?
～悩める新人達よ、つどいなさい。
一緒に話そう！探ろう！
そして見つけよう！～

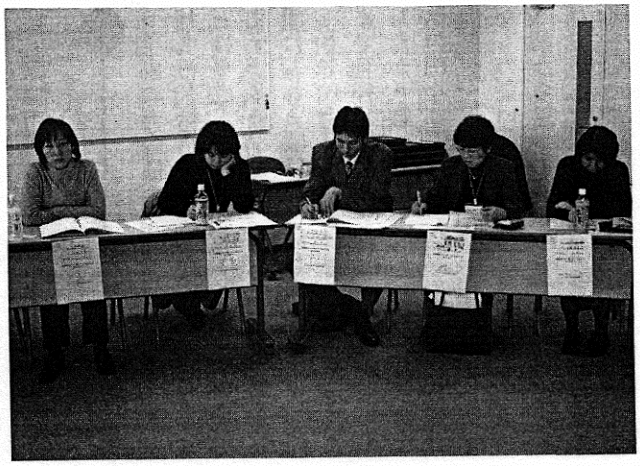
相談役
西南学院大学文学部社会福祉学科
教授　賀戸　一郎　氏
福岡市中央区社会福祉協議会
事務局次長　松尾　林　氏

この分科会では、三年未満の社協職員を対象に、西南大学社会福祉学科の賀戸教授と福岡市中央区社協の松尾事務局次長を相談役として「社協って何…」について話し合いました。

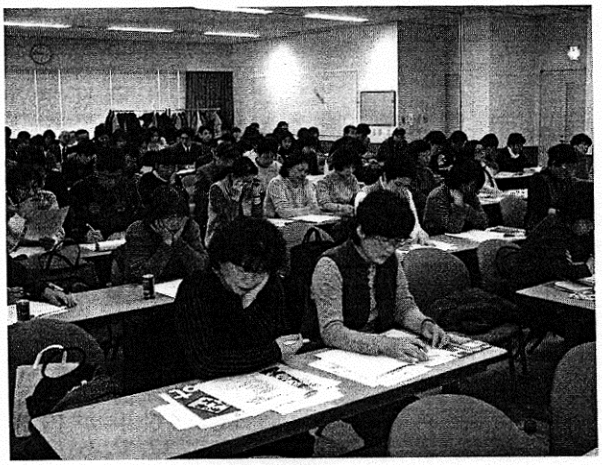
本題に入る前に参加者の緊張をほぐし、話しやすい雰囲気を作るため二種類のアイスブレイクを行いました。みなさん笑顔で楽しく参加でき、和やかな雰囲気で話を始めることが出来ました。

前半は、「社協に入ったきっかけ」「社協の役割」「現在どんな気持ちで、またどんなことにがんばっているか」を各自の体験や想いを自由に話してもらいました。

学生時代に福祉のことを学び入社した人もいれば、全く違うことを学んだが入社した人、再就職で入社した人など、これまでの道筋が様々でしたが、「社協が何をしている団体なのか今も明確にわからない。」「地域に出ることはなく、事務処理に追われている。」「自分の考えはあるのだが、職場内での意見交換や話し合いをする場がない。」などの共通の意見が出ました。



後半は、当初 前半の話の中から共通する部分を探し、掘り下げていくことにしていましたが、業務の職種が異なることもあり一つに絞れずにいました。そこで、賀戸教授の意見として、「社協は福祉的な専門知識がなくても業務が行えるのか。事業型に従事している人は、知識や新人の有無に関わらず、容赦なく業務をやらなければならないが、コミュニティワークは何をもって資格や知識を必要とされているのか。ケースバイケースで状況に応じてやっていくのが専門性なのか。」と問われ、社協をわからないのならば、社協で業務を行いながら学んでいかなければならないことから〝社協には連携が取れているのか〟ということについて意見を出してもらいました。その中で「職種が違うと何をやっているのかわからない。」「先輩からのアドバイスがない。（社協をわからないままに先輩になる悪循環）」ということから、〝社協は人材を育てるのが下手な組織なのでは〟との指摘がありました。中には「近隣の社協が集まり自主的に勉強会を行っている。」「地職連では、コミュニティーワーク実践研究会（自主研修）を月一回行っている。」という意見が出ました。



これらの意見を集約してこの分科会として「自分から勉強をする場が必要であり、行動を起こす必要がある。」「各々異なる業務の立場ではあっても、社会福祉に携わる者としての意識を再認識し、共通目標を掲げ、それに向かって連携し、実践していくことが必要である。」とまとまりました。

また、賀戸教授から、「介護保険事業に翻弄されている社協が多い中、一つの事業だけでは社協は成立しない。そこで、地域の受け皿的動きをすることこそが、社協の役目であり、地域福祉を行えない社協は必要ない。」という社協への期待。松尾事務局次長から、先輩としての体験を通し「一つの福祉課題からそれに付随する多くの課題をいかに発掘し、その問題を自分の事として考え、解決に向けて実行してもらえるよう、一人でも多くの人を巻き込み働きかけ、広げていく。」というコミュニティーワークのとらえ方などの話も聞くことが出来ました。

参加者のみなさんが、どのような想いをもって帰ったのかわかりませんが、みなさんの迷いが少しでも軽く、また、この日をきっかけに仲間同士の繋がりを続けていけたらうれしく思います。

「お客さん参加」からの脱皮へ

実行委員長
福岡市中央区社会福祉協議会
事務局次長　松尾　林　氏

今回で4回目を迎える「社協職員のつどい」（以下「つどい」）は北九州市のウエルとばたで「節目のつどい」をコンセ